

# オロシウス『異教徒に反駁する歴史』序文のラテン語について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2015-08-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石黒, 太郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/17373">http://hdl.handle.net/10291/17373</a>

## オロシウス『異教徒に反駁する歴史』序文 のラテン語について

石 黒 太 郎

ラテン教父オロシウス Orosius<sup>1)</sup> が5世紀前半に著した『異教徒に反駁する歴史』*Historiae aduersus paganos* (以下、『歴史』)には筆者の知るところ日本語訳が存在しない。近代以降はその重要性が失われ、顧みられることが少なくなったとはいえ、中世においては古代史を知る上での必読書、標準的な参考書と見なされていた<sup>2)</sup>ほどのものである。たとえばイングランドのウェセックス王アルフレッド大王は教皇グレゴリウス著『牧者の心得』の古英語訳に寄せた序文で「すべての人が知る必要のある書物」<sup>3)</sup>を英訳し、学芸の復興を図る計画を述べ、後にオロシウスの『歴史』とベーダの『英国民教会史』、それぞれの古英語訳<sup>4)</sup>を公認したと考えられている(久保内56)。つまりオロシウスで世界史、ベーダでイングランド史を学ぶということである。中世の著名な歴史家もオロシウスの『歴史』に典拠を求めた。ベーダやトゥールのグレゴリウス、ギルダスもその中に数えられる(Fear 25)。だが他の一次資料が手に入るようになった近代では、様々な資料の抜粋集 *compendium* であったオロシウスの『歴史』は必要性が低下したようである。1844年にオロシウスの生涯と『歴史』について考察した Theodor Mörner はその序文の冒頭で次のように記している。

古代の著作家でオロシウスほど権威の浮き沈みを経験した作家はいなかったように思われる。オロシウスの最新の刊本<sup>5)</sup>が出てから100年以

上が経っているが、それが出た当時オロシウスはもっとも有名な著作家であったのに、今日ではその名前を言及することは滅多にない<sup>9)</sup>。

18世紀から19世紀までにはオロシウスに対する関心が廃れてしまったといっているのである。最も新しい刊本を出した Marie-Pierre Arnaud-Lindet もその序文で、オロシウスの典拠とした古代の著作が容易に手に入るようになるに従って、オロシウスに対する関心が減少したと述べている<sup>7)</sup>。F. Paschoud は「啓蒙の時代」18世紀になって、歴史の参考書としての地位を失ったといっている。

このように中世と比べると現代では歴史的資料としての価値を大いに下げたしまったオロシウスの『歴史』であるが、古代後期から中世にかけてのキリスト教的な世界史観を知るには重要な書物である<sup>8)</sup>。『歴史』の序文でオロシウス自身が表明している通りであるとすれば、『歴史』はアウグスティヌスの『神の国』*De ciuitate Dei* を補完するはずの書物であった。『新カトリック大事典』では『神の国』を補完する護教的歴史書として『歴史』を紹介している（「オロシウス」の項）。当時のローマ帝国内の異教徒たちは次のような主張をしていたという。410年にローマ市が略奪されることに象徴されるローマの苦悩はローマが伝統的な異教を棄てキリスト教を信仰するようになったからだ。キリスト教が広まる前はローマにとってもっと幸福な時代だった。こういう主張に対して反論をするために、キリスト教が広まる以前も人間の苦悩は多かったということをも、史実をもって証明する書物。アウグスティヌスがオロシウスに執筆を依頼したとされるのはそういう書物である<sup>9)</sup>。

『歴史』の近代的な刊本は1738年の Sigebert Haverkamp 校訂のものに始まる。1882年には Karl Zangemeister が Corpus scriptorum ecclesiasticorum latinorum 叢書に長く標準テキストとして使われることになる刊本を出した。1889年に Teubner 叢書の1巻として出たその簡易版の前書き

によると (v), これは当初 Karl Halm が Teubner 叢書に出すために始めた校訂であったのだが, 出版が遅れているうちにウィーン大学が『歴史』の校訂を Zangemeister に委嘱して 1882 年に出したものだという。その後, Halm が Zangemeister に自分の代わりに出すよう依頼したため, 異読を記した apparatus criticus を省く形で 1889 年版が Teubner 叢書として出たのである<sup>10)</sup>。

20 世紀後半には 2 つの刊本が出ている。Adolf Lippold が校訂したものに Aldo Bartalucci がイタリア語訳をつけた対訳本が 1976 年に Fondazione Lorenzo Valla から Scrittori greci e latini 叢書の 1 つとして出ており, その校訂をもとにこんどは Lippold 自身が 1985 年にドイツ語の翻訳を出している。そして 1990-91 年に Arnaud-Lindet によるフランス語対訳版が Les Belles Lettres 叢書から 3 巻本で出た。apparatus criticus はもちろん, オロシウス自身に関する解説を含めた詳細な Introduction や註釈を備えた刊本である。今後は Zangemeister 版に取って代わり, 『歴史』の標準的なテキストとなるだろう。

英訳は Raymond (1936), Deferrari (1964), Fear (2010) の 3 つが出ている。フランス語訳は私の調べたところでは Arnaud-Lindet の対訳のみ。その一方でスペイン語訳は 1980 年代に 2 件出ている。Sánchez Salor (1982) と Torres Rodríguez (1985) である。オロシウスがイベリア半島出身とされているためなのか, オロシウスの人物に関する解説が詳しい。

このようにすでに現代の刊本があり, 現代語訳も何種か出ているのだが, その現代語訳を比較するとオロシウスのラテン語の解釈に相違が見られる箇所がある。対訳版を出した Lippold and Bartalucci と Arnaud-Lindet を除くと, 他の訳者は Zangemeister 版のテキストを利用しているから, 翻訳にあたって原典として使用したラテン語テキストは同一のものはずである。参考とする現代語訳がありながらも同一の表現に異なる解釈が出るということは, 単に誤訳ということではなく, そのラテン語原典の表現が曖昧か, 解

積の難しいものだということを示している。オロシウスの記すラテン語の文体と、それを記したオロシウス自身の教養について、従来はかなり低く評価されていた。だが、5世紀に活動したオロシウスの意義を、5世紀の文芸と社会という文脈で正当に評価しようとする *Orosius and the Rhetoric of History* で Peter Van Nuffelen は、オロシウスが弁論術を教える学校で十分な教育を受け、そこで学んだ修辞学の知識と技法を駆使して、同じく高い教養を身につけた読者に向かって『歴史』を著したのだと主張している。Van Nuffelen がいうように、実際に古代後期の読者はオロシウスの高度な弁論術、修辞法を称えていたし、また『歴史』のラテン語からオロシウスには時として難解ではあるけれども流麗な散文を書く能力があることが明らか(24)である。『歴史』のなかでは様々な古典作品の文章をほのめかす表現が随所に見られる。その典拠をその都度明示しなくとも読者がその引喩 allusions を理解すると考えたということは、想定した読者層もオロシウス同様に弁論術の学校で典型的な作品を読み、その文言を暗記するように知識として備えている読者層<sup>11)</sup>であったはずだ(43)という。オロシウスのラテン語には古典ラテン語の文法規則から逸脱した表現はほとんど見当たらない。テキストの伝承に原因がない限り、オロシウスのラテン語には同時代の読者が理解し得た意味が示されているはずである。それを現代の我々が理解するには相応の努力が必要である。この小論では『歴史』の序文の2カ所の表現を取り上げ、それを複数の現代語訳がどう解釈しているかを比較。これまで認識されなかった新たな解釈を提案するものである。

『歴史』序文は次の文言で始まる。

Praeceptis tuis parui, beatissime pater Augustine; atque utinam tam efficaciter quam libenter. quamquam ego in utramvis partem parum de explicito mouear, rectene an secus egerim. tu enim iam isto iudicio laborasti, utrumne hoc, quod praeciperes, possem: ego

autem solius oboedientiae, si tamen eam uoluntate conatuque decorauī, testimonio contentus sum. (1.prol.1-2; Zangemeister [1882] 1)<sup>12)</sup>

序文は「師」アウグスティヌスの依頼に応じてこの『歴史』を著したことを表明する形となっており、その冒頭で我々は奇妙な表現に出会うことになる。すなわち *in utramuis partem parum de explicito mouear* と見慣れぬ表現にさっそく戸惑うことになる。Sánchez Salor が指摘しているように、これは次のリウィウスの冒頭を彷彿とさせる文言で、オロシウスが自分を古代の偉大な歴史家たちの中に数えてもらえるよう意図したものだろう (1: 77)。

Facturusne operae pretium sim si a primordio urbis res populi Romani perscripserim nec satis scio nec, si sciam, dicere ausim... (Praefatio 1)<sup>13)</sup>

リウィウスを模倣していることから全体の趣旨はわかる。だが自分がアウグスティヌスの命じたことを正しく実行できたのか、アウグスティヌスの期待とは裏腹にうまく実行できなかったのか (*rectene an secus egerim*) ということについて、リウィウスが *nec satis scio* といったように自分にはわからないといたいのか、それとも *nec, si sciam, dicere ausim* といったように、たとえ知っていても自分にはいうつもりがないといたいのか、一見、オロシウスの文言ははっきりとしない。つまり *in utramuis partem parum ... mouear* と *de explicito* の解釈が難しいのだ。この箇所が難解であったことの傍証として、14世紀にイタリア語からアラゴン語に翻訳したものがあるが、その校訂者によればこの部分のラテン語を理解できずに誤訳しているという (Romero Cambrón 29)。

*quamquam* 以下を各訳者がどう翻訳しているか、該当箇所を出版年順に

引用してみよう。

Raymond: I am not at all certain, however, that I have done the work well. (29)

Deferrari: However, I am not completely convinced as to the result, whether I have done well or otherwise. (3)

Bartalucci: Per quanto, riguardo all'opera compiuta, io non mi lascio turbare troppo da questo dilemma, se ho lavorato bene o no: (Lippold and Bartalucci 1: 6)

Sánchez Salor: Aunque del resultado, poco me preocupa si lo he hecho bien o no. (1: 77)

Torres Rodríguez: Aunque poco me voy a detener en explicar si he hecho bien o mal; (87)

Lippold: Indes bin ich beim Blick auf das Zustandegebrachte nach beiden Seiten hin nicht sehr besorgt darum, ob ich gut oder schlecht gearbeitet habe: (1: 59)

Arnaud-Lindet: ... quoique, dans ces deux perspectives je ne sois pour ma part guère franchement troublé par la question de savoir si j'ai bien ou mal fait. (1: 6)

Fear: However, in either event I hardly feel the urge to explain whether I have done well or badly ... (31)

「うまくできたかどうかわからない」と解釈しているのが Raymond と Deferrari で、その他の Bartalucci 以降の訳者は基本的に「うまくできたかどうか、自分は関心がない」としている。in utramuis partem parum... mouear の utramuis pars が間接疑問文の内容を指していることは容易に理解できるのだが、moueri という受動態の意味が明白ではない。この類

例を古典作品に求めると、ひとつキケロの文章に用例を見いだすことができる。

Huic [Aristoni] summum bonum est in his rebus neutram in partem moveri, quae ἀδιαφορία ab ipso dicitur<sup>14)</sup> (*Academica* 2.130)

オロシウスがキケロのこの文章を読んだ証拠はないが、『歴史』の中に見られる高度なラテン語の修辞法、古典作品からの引用を考えると、こういう表現を知っていたとしても不思議はない。英語のラテン語辞典にこの用例の記載は見当たらないが、フランスの代表的なラテン語辞典 *Le grand Gaffiot* の *moveo* の項を引くとこの用例が引かれてあり、“être impassible, indifférent” という語義まで記載してある。この用例の認識があって、Bartalucci 以降の訳者が「うまくできたかどうか、自分は関心がない」という訳に落ち着いたのであろう。キケロの言葉を踏まえているにせよ、オロシウスのこの表現は非常に珍しい例であることに違いはない。

さて、*de explicito* という表現の解釈である。形態からいえば前置詞 *de* + 受動完了分詞ということになるのだが、その場合は説明 *explicare* した内容が不明でこの解釈は成り立たない。そこで *explicare* の派生語だと想定すると次の2つの解釈が可能になる。第1は *de explicito* で副詞 *explicito* と同義と考える方法である。実際 Blaise の辞典には “*pro explicito, c. explicito: scol.*” という記載が *explicitus* の項に見出せる。スコラ派は時代がずいぶんと下ってしまうが、それでも前置詞をつけて副詞句を作ることは珍しくないため、この解釈は不可能ではない。さらに Arnaud-Lindet の *apparatus criticus* によれば2番目に古いとされる7世紀後半のB写本<sup>15)</sup> には *de* が省かれているので、奪格の副詞的用法とすればなお *explicito* と同義ととることができる。Arnaud-Lindet は明らかにこの解釈で *parum de explicito* を “*ne sois pour ma part guère franchement!*” としている。そ



しておそらく Deferrari の “not completely” もここを「はっきり」とはしないが、似たような副詞で解釈しようとしたものであろう。

その一方で de explicito の第 2 の解釈は Torres Rodríguez と Fear が採用しているものである。彼らはこれを様態の副詞とはとらずに前置詞＋名詞ととっているようだ。explicare の動作を表す名詞として古典でも用例の見られる語は explicatus である。Glare の *Oxford Latin Dictionary* にもプリニウスとキケロの用例とともに項目が挙げられている。explico の項にある説明によれば、explicauī, explicatum が初期のラテン語での標準的な活用形であるものの、explicui, explicitum という活用形がキケロよりも後にはそれにとって代わったようである。なるほどそのことから explicatus の異形として \*explicitus という第 4 変化名詞があっても不思議はない。そのような形で試みられた解釈であろう。だが第 4 変化名詞であるから explicitu となるはずの奪格形が explicito になっていることは看過できない。オロシウスの名詞変化が古典文法のそれを大きく逸脱することはない。いささか無理のある解釈と考えざるを得ない。この解釈の困難は de を省いた B 写本の読みに従っても解消されることがない。テキストにあるがままの形を解釈しようとするならば、de explicito を「説明することについて」と読むのは難しいといわざるを得ない。

従って de explicito には上に挙げた各訳者とは別の解釈が求められる。筆者は explicito を形容詞 explicitus の名詞的用法としてとらえることを提案する。Glare の辞書には explicatus という形容詞の項目が立てられていて “Clear, straightforward” という語釈がつけられている。「自分がうまくできたのかどうかという、明白なことについて自分はどちらだということに関心はない」つまり、わかりきったことだといいたいのだと解釈すべきなのである。なぜそれが「明白」なのかといえば、テキストでそれに続く tu enim...があるからである。「なぜなら、お命じになることについて私が遂行できるものかどうかというご判断を、すでに先生ご自身がなさっているか

ら」自分がうまくできたのは当然だというのである。これまでの翻訳者もこの解釈の可能性を考えたはずであるが採用しなかった。

この『歴史』に付された序文は「師」アウグスティヌスにオロシウスが宛てた献辞であり、また上に見たように現代の我々にもリウィウスの序文を彷彿とさせるものである。オロシウスはリウィウスの序文をまね、自分の能力を謙遜してこの献辞を書いている。だから自分の能力を誇示するようなことを書かないはずだという思い込みが訳者の中にあっただのではないか。実際に、序文の中でオロシウスは次のように書いている。

... cum subiectio mea praecepto paternitatis tuae factum debeat totumque tuum sit, quod ex te ad te redit, opus meum, hoc solo meo cumulatius reddidi, quod libens feci. (1.prol.8; Zangemeister [1882] 3)

「下僕である私は家父である先生からこの作品をお借りしているのに過ぎず、先生に発し、先生へと帰するものはその全部が先生のものです」と一見したところきわめて謙虚にしているように見える。その後が続く「私の作品も、私が進んで作った分だけ増量してお返ししたのです」という文言もこれだけ見れば自分の非才をいっているようにも読める。だが実際の『歴史』は、アウグスティヌスの依頼に従って著したものであるという体裁をとってはいるものの、アウグスティヌスの依頼したものを分量、複雑さの点で大きく超えた作品となっている (Rohrbracher 139)。さらに重要なことにアウグスティヌスとオロシウスでは異教徒に対して主張されている歴史観が根本的に異なっている。一方でアウグスティヌスが『神の国』で主張している歴史観は、キリスト教以前も以後も、災害、戦禍などで人間の被る悲惨さに変わりがない。だから異教の神々を棄ててキリスト教を信仰するようになったからローマ帝国が瓦解しはじめているのだという主張はあたらないというものだ。他方でオ

ロシウスが『歴史』の中で訴えるのは、キリスト教以前の世の中の方がよかったと考えるのは誤りで、キリスト教以前も以後も人間は災害、戦争でつらい思いをしてきているが、キリスト教以前の悲惨さに比べれば5世紀初頭の今日は十分に耐えられる程度のものであるということだ。この根本的な差異に気がついた20世紀半ばの研究者は、オロシウスの能力が足らなかったがために師の依頼を誤解したというように考えていた (Van Nuffelen 5-9)。それはオロシウスの教養を過小評価しなければ説明ができない。だがオロシウスは上で述べたように弁論術の学校で相当な訓練を受けたと考える方が妥当で、そうするとこども額面通りには受け取らず、「師」アウグスティヌスの権威を利用して自分の「増量した」業績を読者に印象づけようと狙ったものと考えられる。名もなきスペイン出身のオロシウスが読者から信用され、また反論相手に対して説得力を持つためには、アウグスティヌスのような偉大な教父の権威 *auctoritas* を必要としたのである。

この序文は冒頭から献辞の体裁をとりながらも、アウグスティヌスの権威を借りて自著の信用を高めようとする意図で書かれたものと考えられるべきである。そのような読み方をすれば、「お命じになることについて私が遂行できるものかどうかというご判断を、すでに先生ご自身がなさっているから」自分の書き方には間違いがなく *recte*、さらには自ら進んで書いたのと同程度に効果的に *tam efficaciter quam libenter* 書けたということはすでに「はっきりとしていること」*explicitum* なのである。

*de explicito* をこのように解釈すれば、序文の冒頭は次のように翻訳できる。

最も幸いなる父アウグスティヌス先生。私は先生の数々のご命令に従って参りました。私が自ら進んで従ってきたように、成果も相応にあったことを願うばかりです。でも自分が先生のご期待通りの成果を出したのか、またはご期待を裏切ったのかという明白になっていることについて

私にはどちらだという気持ちはありません。というのも、先生がこの仕事をお命じになろうとするにあたり、私にできるものかどうかという判定については、先生にすでにお骨折りいただいているからです。

この後オロシウスは飼い犬とその飼い主である家父長に自分とアウグスティヌスをたとえ、自分がアウグスティヌスの命令に喜んで従う旨を述べているが、この飼い犬の喩えは Arnaud-Lindet などが注をつけているのでここでは述べない<sup>16)</sup>。

その後再びオロシウスは自分がアウグスティヌスの命令に従ったことを明言するその箇所は次のようになっている。

igitur generali amori tuo speciali amore conexus uoluntati tuae uolens parui. nam cum subiectio mea praecepto paternitatis tuae factum debeat totumque tuum sit, quod ex te ad te redit, opus meum, hoc solo meo cumulatius reddidi, quod libens feci. (1.prol.8; Zangemeister [1882] 3)

引用の後半部はすでに上で触れた箇所である。最初の generali amori tuo speciali amore conexus にある下線を施した tuo をどうとらえるべきか。amori は与格、amore は奪格。だが tuo はそのどちらともとることができる。訳者たちも迷ったのか訳し方が分かれている。

Raymond: Therefore, since the love that all have for you is in my case united with a special love, I have willingly obeyed your wish. (30)

Deferrari: So bound by a love for you, possessed by all, and by my own special love, I willingly have obeyed your wish. (4)

Bartalucci: Legato a te dall'amore che tutti ti portano e dal mio proprio amore, ho dunque obbedito di buon grado alla tua volontà. (Lippold and Bartalucci 1: 9)

Sánchez Salor: Así yo, atado al amor que tú tienes a todos por mi especial cariño hacia ti, he obedecido de buen grado tus deseos. (1: 78)

Torres Rodríguez: Por tanto, incluido en el afecto que todos os profesan con un amor especial, he obedecido gustoso a tu voluntad. (89)

Lippold: Da ich Dir also außer durch die allgemein gegenüber Dir empfundene Liebe auch durch persönliche Liebe verbunden bin ... (1: 60)

Arnaud-Lindet: Ainsi donc, lié à l'amour universel par ton amour particulier, j'ai volontairement obéi à ta volonté ... (1: 7)

Fear: Thus, bound by special love to that general love which you inspire, I willingly obeyed your will ... (31)

他の訳者は *generalis amoris tuo* という繋がりでは *tuo* を解釈しているが、ひとり Arnaud-Lindet は *tuo speciali amore* と後に続く *amore* を修飾するものとしてとらえている。さらにこの所有形容詞は主格的意味と目的格的意味の両方を表すこともできるので、*generalis amoris tuo* という繋がりでも「先生がすべての人に対して持つ愛」と主格的にも、また「先生に対してすべての人が持つ愛」と目的格的にも解釈が可能である。主格的にとっているのは Sánchez Salor、それ以外は目的格的に解釈をしている。

これらもオロシウスが修辞法に長けた作家であると考えれば意図的に曖昧にしているのだとわかる。所有形容詞の置かれた位置は与格の名詞句 *generalis amoris* と奪格の名詞句 *speciali amore* の間にある。これはオロシ

ウスが共有構文 *apo koinou* と呼ばれる構文を使っていると考えるべきであろう。共有構文はインドヨーロッパ語に広く使われている構文である。それをゲルマン語派の共有構文を考察した論考で Herbert Dean Meritt が “It is a kind of verbal economy: a word or closely related group of words, expressed but a single time, serves at once a twofold grammatical function” と明快に定義している (7)。*tuo* が与格にも奪格にも取れるようにオロシウスが意図的に配置したものと考えると、上の各訳者の解釈を総合した新たな解釈が生まれる。さらに *generali amori tuo* が主格的、目的格的な意味の両方を備えていたとすると、少ない語数で幅広い意味合いを出すことに成功している。これは一つにはアウグスティヌスの権威を称揚するため、そしてもう一つにはそのアウグスティヌスの権威を利用して自著の信頼性を高めようという意図を読み取ることができる。

オロシウスが共有構文を利用したとすると上の引用の後半部の解釈も共有構文を利用して意味が明確になってくる。*subiectio mea praecepto paternitatis tuae factum debeat totumque tuum sit ... opus meum* においても、下線を施した *factum* は *debeat* の目的語であり、かつまた *sit* の主語 *opus meum* を修飾している分詞ととることもできる。それによって *factum* が *opus meum* とその補語 *totum tuum* の両方に繋がり、読者には *debeat* の目的語として *factum opus meum, id est totum tuum* という全体が印象づけられるようになっている。

共有構文を組み合わせた表現だと解釈すると、上の引用には次のような翻訳がつけられる。

従って、先生に対する私ひとりの愛情を介して先生の皆に対する広い愛、皆が広く先生を慕う愛に結びついた結果、私は先生のお望みに自ら望んで従いました。また下僕である私は父である先生のご指示により完成したこの作品を拝借しているに過ぎず、先生に発し、先生へと帰するもの

は、その全部が先生のものであります。私の作品も、私が進んで作った分だけ量を増してお返ししたに過ぎないのです。

この小論ではオロシウスが著した『歴史』の序文の冒頭を見ただけであるが、これまでの訳書はオロシウスのラテン語がもつ本来の価値を伝えることができている可能性のあることを示すことができた。『歴史』を単なる歴史書としてではなく、歴史書という形を使い、高度な修辭法と弁論術を駆使して展開した護教論と考えると、オロシウスの再評価に繋がるのかもしれない。『歴史』はさらなる調査、研究が必要な古代後期の著作なのである。

#### 《注》

- 1) オロシウスは Paulus Orosius と呼ばれることが多いが、このパウルスという名前は中世の写本に付されていた Orosius P. の P. を名前と勘違いしたものであると今日では考えられている (Fear 1)。オロシウスについては Torres Rodríguez, Arnaud-Lindet, Fear などによる訳書の序論のほか、Frend が *Augustine through the Ages: An Encyclopedia* に寄せた項目、Onica の学位論文が参考になる。
- 2) Bjork 編の *The Oxford Dictionary of the Middle Ages* は “it became a standard historical and geographical text in the MA” と記している (“Orosius”)。
- 3) “suma bec, ða þe nidbeðyrfesta sien eallum monnum to witanne” (Sweet [ed.] 6) 以下、断りのない限り日本語訳は筆者による。
- 4) 『歴史』の古英語訳は Bately, 『英国民教会史』は Sweet, それぞれによる刊本がある。
- 5) Haverkamp が 1738 年に出した刊本のこと。
- 6) “Vix ullus veterum auctorum tantam auctoritatis suae vicissitudinem subiisse videtur, quam Orosius. Cuius nomen hodie raro tantum memoratur, post cuius historiarum editionem recentissimam plus centum praetere anni, idem erat quondam notissimus, celeberrimus.” (1)
- 7) “Prolongé à l'époque moderne par de nombreuses éditions, le succès des *Histoires* ne se démentit pas de longtemps, mais, peu à peu, malgré l'édition critique qu'en donna K. Zangemeister en 1882 l'intérêt porté à Orose s'amenuisa...” (1: vii)

- 8) “O[rosius]’s importance today is not in his value as a source: in fact he gives us little that we cannot find in older and more reliable historians. But he provides fundamental evidence of the history of ideas in his time…” (Paschoud).
- 9) 中世から現代まで、アウグスティヌスとの関係で下されてきたオロシウスに対する評価については Friend の “Augustine and Orosius” や Hillgarth, Mommsen の各論考を参照のこと。
- 10) 1889 年版の前書きには 1882 年版の訂正が記されており、簡易版の参照も必要である。
- 11) アウグスティヌスの通った学校での教育について Peter Brown は “The content of his education ... imposed a crushing load on the memory: a friend of Augustine’s knew all Vergil and much of Cicero by heart” (24) と書いている。
- 12) 『歴史』の引用は Zangemeister 版につけられている巻・章・節番号と Zangemeister 版の頁番号による。以下、同様。
- 13) 「この市（ウルプス）の起源から筆をおこしてローマ人民の事跡を書き通したならば、辛苦の甲斐ある作品をつくれるかどうか、私にはよく分からないし、よしんば分かるにしろ敢て口にはするまいと思う」（鈴木一州訳 9）。
- 14) 「アリストのもつ最高の善は、こういう事柄に関してどちらの側にも心を動かされないことである。それをアリスト自身が ἀδιαφορία（無関心）と呼んでいる。」
- 15) Milan, Ambrosiana Library D 23, s. vii<sup>2</sup> (Arnaud-Lindet 1: lxxi).
- 16) Arnaud-Lindet 1: 191; Van Nuffelen 31-41; Fear 31; Sánchez Salor 1: 78 など。

#### 参考文献

- 久保内端郎「古英語の散文」『中世イギリス文学入門 研究と文献案内』（高宮利行・松田隆美編）雄松堂出版，2008。53-65。
- 上智学院新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』全4巻＋別冊2巻。研究社，1996-2010。
- Arnaud-Lindet, Marie-Pierre, ed. and trans. *Orose: Histoires (contre les paiens)*. 3 vols. Paris: Les Belles Lettres, 1990-91.
- Bately, Janet, ed. *The Old English Orosius*. Oxford: Early English Text Soc., 1980. EETS supp. ser. 6
- Bjork, Robert E., ed. *The Oxford Dictionary of the Middle Ages*. 4 vols. Oxford: Oxford UP, 2010.
- Blaise, Albert, ed. *Lexicon latinitatis mediæ aevi, praesertim ad res ecclesiasticas*



- investigandas pertinens*. Turnhout: Brepols, 1975. Corpus christianorum continuatio mediaevalis.
- Brown, Peter. *Augustine of Hippo: A Biography*. Rev. ed. Berkley: U of California P, 2000.
- Cicero. *De natura deorum; Academica, with an English Translation by H. Rackham*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1933. Loeb Classical Library 268.
- Deferrari, Roy J., trans. *Paulus Orosius: The Seven Books of History against the Pagans*. Washington: Catholic U of America P, 1964. The Fathers of the Church 50.
- Fear, A. T., trans. *Orosius: Seven Books of History against the Pagans*. Liverpool: Liverpool UP, 2010. Translated Texts for Historians 54.
- Freund, William H. C. "Augustine and Orosius on the End of the Ancient World." *Augustinian Studies* 20 (1989): 1-38.
- \_\_\_\_\_. "Orosius, Paulus." *Augustine through the Ages: An Encyclopedia*. Ed. Allan D. Fitzgerald et al. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1999.
- Gaffiot, Félix, ed. *Le grand Gaffiot: dictionnaire latin-français*. 3rd ed. Rev. and enl. Pierre Flobert. Paris: Hachette, 2000.
- Glare, P. G., ed. *Oxford Latin Dictionary*. 2nd ed. 2 vols. Oxford: Oxford UP, 2012.
- [Haverkamp, Sigebert], ed. *Pauli Orosii aduersus paganos historiarum libri septem, ut et apologeticus contra Pelagium de arbitrii libertate*. Leiden, 1738.
- Hillgarth, J. N. "The *Historiae* of Orosius in the Early Middle Ages." *De Tertullien aux Mozarabes: antiquité tardive et Christianisme ancien: mélanges offerts à Jacques Fontaine, membre de l'Institut, à l'occasion de son 70<sup>e</sup> anniversaire, par ses élèves, amis et collègues*. Institut de Recherche et d'Histoire des Textes. Ed. Louis Holtz and Jean-Claude Fredouille. Paris: Institut d'Études Augustiniennes, 1992. Collection des études augustiniennes, série moyen-âge et temps modernes 26. 2: 157-70.
- Lippold, Adolf, trans., and Carl Andresen, introd. *Paulus Orosius: Die antike Weltgeschichte in christlicher Sicht*. 2 vols. Zurich: Artemis, 1985. Die Bibliothek der Alten Welt, Reihe Antike und Christentum.
- Lippold, Adolf, ed., and Aldo Bartalucci, trans. *Orosio: Le storie contro i pagani*. 2 vols. Florence: Fondazione Lorenzo Valla, 1976. Scrittori greci e latini.
- Livy. *Ab urbe condita*. Vol. 1: Books 1-5. Ed. Robert Maxwell Ogilvie. Oxford: Oxford UP, 1974. Oxford Classical Texts. 『ローマ建国史・上』(鈴木一州訳。第1-2巻)岩波文庫, 2007。
- Meritt, Herbert Dean. *The Construction ἀπὸ κοινοῦ in the Germanic Languages*.

1938. New York: AMS, 1967.
- Mörner, Theodor. *De Orosii uita eiusque historiarum libris septem aduersus paganos*. Berlin, 1844.
- Mommsen, Theodor E. "Orosius and Augustine." *Medieval and Renaissance Studies*. Ed. Eugene F. Rice, Jr. Ithaca, NY: Cornell UP, 1959. 325–48.
- Onica, Paul A. "Orosius." Diss. U of Toronto, 1987.
- Paschoud, F. "Orosius." *Encyclopedia of the Early Church*. Prod. the Institutum Patristicum Augustinianum. Ed. Angelo Di Berardino. Trans. Adrian Walford. Cambridge, Eng.: James Clarke, 1992.
- Raymond, Irving Woodworth, trans. *Seven Books of History against the Pagans: The Apology of Paulus Orosius*. New York: Columbia UP, 1936.
- Rohrbacher, David. *The Historians of Late Antiquity*. Abingdon: Routledge, 2002.
- Romero Cambrón, Ángeles, ed. *Historias contra los paganos: versión aragonesa patrocinada por Juan Fernández de Heredia*. Zaragoza: Zaragoza UP, 2008. Larumbe: Textos Aragoneses 50. Historia y Pensamiento.
- Sánchez Salor, Eustaquio, trans. *Orosio: Historias*. 2 vols. Madrid: Editorial Gredos, 1982. Biblioteca Clásica Gredos 53–54.
- Sweet, Henry, ed. *King Alfred's West-Saxon Version of Gregory's Pastoral Care, Part I*. London, 1871. EETS os 45.
- Torres Rodríguez, Casimiro. *Paulo Orosio: su vida y sus obras*. Santiago de Compostela: Fundación "Pedro Barrie de la Maza," 1985.
- Van Nuffelen, Peter. *Orosius and the Rhetoric of History*. Oxford: Oxford UP, 2012. Oxford Early Christian Studies.
- Zangemeister, Karl, ed. *Pauli Orosii historiarum aduersum paganos libri vii, accedit eiusdem liber apologeticus*. Vienna, 1882. Corpus scriptorum ecclesiasticorum latinorum 5.
- \_\_\_\_\_, ed. *Pauli Orosii historiarum aduersum paganos libri vii*. Leipzig, 1889. Bibliotheca scriptorum graecorum et romanorum teubneriana.